教師の教職意識と教育活動
―― 道徳、クラブ活動、学級経営 ――

藤原正光
（教育学部）

Teacher's Activities and Thoughts
――About Moral Education, Club Activities and Class Management――

Masamitsu Fujihara
Faculty of Education

要　　旨

小・中学校の教師392名を対象にアンケート調査を実施し、以下の結論を得た。

道徳では、役割演技などの指導方法や評価の研修の必要性が示唆され、クラブ活動では、指導体制や設備・備品の整備、教師の積極的参加が、学級経営では、子どもの個性の伸長といじめのないクラスの創造が、問題を抱える子どもの指導では、同僚や保護者の協力が強く求められた。教師は思いやりのある元気な子どものを期待していることも実証された。

問　題

教育課程審議会（1987）の「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」に基づく新しい学力観の導入は、学校現場はもとよりさまざまな教育関係諸機関に大きな変革の波をもたらしている。

小・中学校の教育課程において改善を余儀なくされている具体的な教育活動の領域は、道徳、特別活動であり、生徒指導・教育相談・進路指導であるといえよう。また、新しい学力観に基づく指導要録の改訂も、従来の教育評価の観点からの脱却を促している。

本研究の主な目的は、教育心理学的な立場から、道徳、クラブ活動、学級経営、問題を抱えている子どもの指導及び教師の子ども観についての意識調査を実施し、小・中学校の実態を知るとともに、新しい学力観に沿った改善の糸口を探ることにある。具体的な研究目的について領域ごとに概説してみよう。

1－1　道徳の指導方法

道徳の指導方法は、主題のねらい、児童生徒の実態、資料や指導過程などに応じて適切に選択することが求められている。

小学校指導書・道徳編（平成元年）は、道徳指導の中心的方法として、①話合い、②教師の説話、③読物の利用、④視聴覚教材の利用、⑤役割演技をあげている。

これらの指導方法の利用頻度を知ることにより、実際に行われている授業形態をある程度推測することが可能となろう。

1－2　道徳の授業展開

道徳の授業を効果的に展開していくためには、年間指導計画に基づき、①主題に対する教師の指導意図の明確化、②ねらいに関する児童生徒の実態の把握、③資料に対する子供の反応の予測、④一人一人に配慮した展開の

工夫、⑤授業の留意事項を評価の観点から考慮する、といった点が問題となろう。

主に知識や思考方法の教授を目的とする各教科の指導とは異なり、多くの教師が戸惑っていることが予想される。

2－1　クラブ活動指導上の問題点

クラブ活動は、原則として小学校では4年生以上が、中学校では全生徒が文化的、体育的、生産的または奉仕的な活動のいずれかに参加することが求められている。主なねらいは、異年齢集団への参加を通して、①共通の興味・関心を追求し、②教師の適切な指導のもとに個性や自主性や社会性を発達させ、③学校生活をより充実し、豊かにすることにある。そのためには、教師の個人的な指導能力はもとより、教師間の連携、施設・設備・備品の整備など多くの点が考慮されなければならない。

教師が抱いている問題点を教師の属性（小学校か中学校か、性差）に基づき明らかにしたい。

2－2　クラブ活動指導の改善の方向

クラブ活動指導の改善の方向を、教師に関連している面と児童生徒に関連している面とから探ることを意図した。

児童生徒の自主性・自発性を強調するあまり、教師の適切な指導がなおざりにされている面も往々にして見受けられる。また、逆に技術・技能の習得に力点をおいた指導をよしとする考え方もある。

3－1　学級経営上の留意点

望ましい学級経営は、学校でのすべての教育活動の基礎となっている。学級での活動は教師と児童生徒との相互作用の所産である。

ここでは、教師が教育効果の向上のために児童生徒のどのような特性（個人的な特性か集団に関わる特性）を伸ばすことを意図しているのかを明らかにしたい。

3－2　学級経営上の問題点

学級経営に具体的に取り組んで行く際に大切なことは、①学校・学年の教育目標にそった学級目標の設定、②児童生徒の実態の把握、③すべての教育活動との関連を考慮した年間・月間指導計画の作成、④保護者や関係諸機関との連携などである。

これらの点にどの程度留意した学級経営を目指しているのか、また、現実にはどの程度問題であると認識しているのかを探りたい。

4　問題を抱えた子どもの指導

反社会的行動に限らず不登校や緘黙といった非社会的行動の指導は、教師が直面する最も困難な指導のうちの一つである。カウンセリング・マインドや面接技法など教師の個人的な指導能力の育成はもとより、上司の支援や同僚・保護者の協力、関係諸機関との連携はこれらの子どもたちの指導にとって必要不可欠なことである。

学校現場にいる教師は、これらをどの様に促えているのだろうか。

5　教師の子どもたちへの期待像

深谷昌志ら（1994）は、中学校教師を対象に「望ましい生徒・クラスの状況」を因子分析法により検討した結果、生徒に対する規律統制という現実的なコントロールと、集団協同という理想像が同等に、強く支持されていると結論付けている。

これは、「生徒が楽しそうだ」、「お互いに助け合っている」といった集団協同要因と、「しっかりけじめがつけられている」、「チャイム着席が守れている」といった規律統制要因とを望ましい生徒像として教師が求めていることを示している。

中学校と小学校、性差といった教師の属性に留意しながら検討したい。

方　法

1）調査対象者

埼玉県、東京都公立小学校・中学校に勤務している現職教員（含む管理職）392名を対象に実施した。

表1 調査対象者の内訳

性　差		学校の種類	
男性教師	107	小学校	286
女性教師	258	中学校	106
合　計	392		392

2）調査内容

調査内容は、道徳（道徳の授業方法、道徳の授業展開）、クラブ活動（クラブ活動指導上の問題点、クラブ活動指導の改善の方向）、学級経営（学級経営上の留意点、学級指導上の問題点）、問題を抱えた子どもの指導、教師の子どもへの期待像の5領域からなり、回答方法はいずれも5段階評定尺度法を用いた。

3）調査方法と手続き

大部分の回答票は、平成4年（1992）8月に実施された文教大学教育研究所主催の講習会の参加者に配布、講習会終了後回収した。追加資料は、当該の小・中学校を訪問し後日回収した留置法によった。

4）調査研究計画と結果の分析方法

調査計画は、5領域についてそれぞれ、①因子分析（高木廣文・他1989 HALBAUによるデータ解析入門による）を実施し、②単純集計による分析を行った。単純集計結果は、学校種（小学校と中学校）と性差（男性教師と女性教師）要因別のクロス集計に基づき分析を行った。

結果と考察

1　道徳の授業

1－1　道徳の授業方法

道徳の授業方法として「どの程度利用しているか」を、5項目について5段階評定尺度法（1：利用しない、3どちらともいえない、5：よく利用する）で回答を求めた。

1）因子分析結果からの分析

5つの授業方法について因子分析を実施した結果、以下の2つの主因子を抽出し次のように命名した。

a　子どもの活動中心因子（寄与率：7.28％）：「役割演技」（負荷量：0.38）、「話し合い」（負荷量：0.37）、「視聴覚教材」（負荷量：0.27）

b　教師の活動中心因子（寄与率：3.71％）：「教師の説話」（負荷量：－0.32）、「読物の利用」（負荷量：－0.26）

2）単純集計からの分析

(1) 全体からの分析

道徳の授業でよく利用される方法は、「話し合い」（M＝4.07,SD＝1.01）、「読物の利用（文学作品・子どもの作文など）」（M＝3.80, SD＝1.05）、「教師の説話」（M＝3.64, SD＝0.99）、「視聴覚教材」（M＝3.21, SD＝1.23）、「役割演技」（M＝2.19, SD＝1.19）の順になっており、「役割演技」はあまり利用されていない（尺度値：3以下）方法であることが示された。

(2) 学校種別（小学校と中学校）の分析

小学校で統計上有意により多く利用されている方法は、「話合い」（小学：M＝4.22, SD＝0.91、中学：M＝3.58, SD＝1.16　t＝4.75,

p<.01)、「視聴覚教材」(小学：M＝3.36, SD＝1.12、中学：M＝2.76, SD＝1.21　t＝4.78, p<. 01)、利用頻度は少ないが「役割演技」(小学：M＝2.35, SD＝1.23、中学：M＝1.69, SD＝0.91　t＝5.33, p<. 01) とであった。逆に、中学校でより頻度の高い方法は、「教師の説話」(小学：M＝3.57, SD＝1.00、中学：M＝3.85, SD＝0.95　t＝2.43, p<. 02) のみであった。中学校では、「教師の説話」や「読物」が道徳の授業の中心となっているようであり、「役割演技」はほとんど利用されていないことが伺える。

(3) 性差からの分析

利用されている方法に統計的な有意差の認められた項目は、「話し合い」(男性：3.85,SD＝1.17、女性：4.14,SD＝0.93　t＝2.14,p<. 03)、「役割演技」(男性：1.82,SD＝0.96、女性：M＝2.32,SD＝1.25　t＝3.93,p<.01) であり、いずれも女性教師の方がより多く利用していた。

3) 因子分析と単純分析結果を含めた分析

道徳の授業方法は、子ども活動中心の方法(因子1) と教師活動中心の方法 (因子2) とに分けることができる。小学校での児童活動中心の方法は、「話し合い」が主なものであり。「視聴覚教材」はそれほど多く用いられていない。教師活動中心の方法は、「読物の利用」と「教師の説話」がほぼ同じくらい利用されているようである。中学校では、「教師の説話」や「読物の利用」といった教師活動中心の方法がより多く用いられ、「視聴覚教材」や「役割演技」はほとんど利用されていない。また、女性教師の方が幅広く道徳の授業方法を展開しているようである。

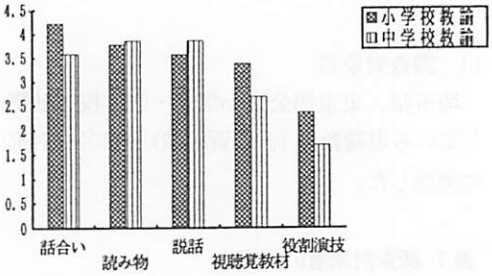

図1－1　道徳の授業方法
(小・中学校別)

1－2　道徳の授業展開

道徳の授業を展開していく上で「むずかしい」と感じている度合を5項目について5段階評定尺度法 (1：どちらともいえない、3：かなりむずかしい、5：非常にむずかしい) で回答を求めた。

1) 因子分析結果からの分析

「むずかしい」と感じている度合を5項目について因子分析し、2つの主因子を抽出し以下のように命名した。

a　授業中に関わる因子 (寄与率：22.07％)：「児童・生徒の反応」(負荷量：0.64)、「授業効果 (子どもへの効果)」(負荷量：0.56)

b　教師の能力に関わる因子 (寄与率：14.65％)：「授業の自己評価」(負荷量：0.39)、「教材の選択」(負荷量：0.42)、「授業展開の方法」(負荷量：0.52)

2) 単純集計からの分析

(1) 全体からの分析

授業の展開上「むずかしい」と感じている度合は、「授業の自己評価の基準」(M＝3.15, SD＝1.01)、「授業効果 (子どもへの効果)」(M＝3.05, SD＝1.06)、「授業展開の方法」(M＝2.83, SD＝1.02)、「子どもの反応」(M

＝2.74, SD＝0.99)、「教材の選択」(M＝2.73, SD＝1.03) の順となっており、かなりむずかしい（尺度値：3以上）と感じている項目は、「授業の自己評価基準」と「授業効果（子どもへの効果)」とであった。

(2) 学校種別（小学校と中学校）の分析

「授業の自己評価基準」(小学：M＝3.22, SD＝1.11、中学：M＝2.91, SD＝0.96 t＝2.63, p＜.01）にのみ統計上の有意差が、「授業展開の方法」(小学：M＝2.76, SD＝1.01、中学：M＝3.00, SD＝1.05 t＝1.86, p＝.07）と「子どもの反応」(小学：M＝2.67, SD＝0.95、中学：M＝2.92, SD＝1.09 t＝1.92, p＝.06）とにかなりの意識差が見いだされた。「授業の自己評価の基準」については小学校の教師がより「むずかしい」と感じており、「授業の展開」や「子どもの反応」の見方については逆に中学校の教師の方が困難さを感じているとする結果であった。

(3) 性差からの分析

男性教師と女性教師に有意な回答差は認められず、それぞれの項目について同程度の悩みを抱えているようである。

3) 因子分析と単純分析結果を含めた分析

道徳の授業展開上の「むずかしさ」は、授業展開に関するもの（因子1）と教師の能力に関するもの（因子2）とに分けられる。

いずれの設問にも「かなりむずかしい」と感じており、特に、「授業の自己評価基準」の設定に苦慮しているようであり、小学校教師にこの傾向が強くみられた。中学校教師は、「授業展開の方法」や「子どもの反応」の評価に苦慮している傾向が見られた。これは、小学校と違う教科担任制や子どもの発達段階の違いを反映していると考えられる。

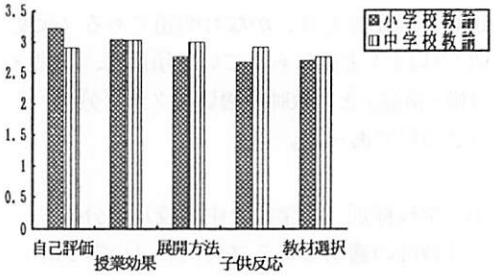

図1－2　道徳の授業展開
(小・中学校別)

2　クラブ・部活動

2－1 クラブ活動指導上の問題点

クラブ活動の指導上「問題である」と考えている度合を、5項目について5段階評定尺度(1：どちらともいえない、3：かなり問題、5：非常に問題である）で回答を求めた。

1) 因子分析結果からの分析

指導上の問題点を5項目について因子分析し、2つの主因子を抽出し次のように命名した。

a　教師の個人的関連因子（寄与率：24.42%)：「指導技術」(負荷量：0.57)、「教師の体力」(0.61)

b　指導体制や施設関連因子（寄与率：13.10%)：「子どもの能力差」(負荷量：0.36)、「施設・設備・備品」(負荷量：0.45)、「教師の適切なクラブ分担」(負荷量：0.43)

2) 単純集計からの分析

(1) 全体からの分析

クラブ活動の指導上「問題である」と感じている度合は、「施設・設備・備品」(M＝3.65, SD＝1.03)「教師の適切なクラブ分担」(M＝3.41, SD＝1.13)、「指導技術」(M＝2.95,

SD＝1.08)、「教師の体力」(M＝2.77, SD＝1.11)、「子どもの能力差」(M＝2.50, SD＝1.07) の順であり、かなり問題である（尺度値：3以上）と感じられている項目は、「施設・設備・備品」と「教師の適切なクラブ分担」との2項目であった。

(2) 学校種別（小学校と中学校）の分析

「教師の適切なクラブ分担」（小学：M＝3.30, SD＝1.11、中学：M＝3.71, SD＝1.17 t＝3.04,p＜.01)、「指導技術」(小学：M＝2.80, SD＝1.07、中学：M＝3.35, SD＝1.06 t＝4.37, p＜.01)、「教師の体力」(小学：M＝2.67, SD＝1.10、中学：M＝3.05, SD＝1.14 t＝2.86, p＜.01) の3項目に有意な意識差が見いだされた。いずれの項目に対しても中学校の教師がより強い問題点として指摘していた。これは、中学校の教師は、クラブや部活動の指導により長時間携わっておりその成果を他の教師や他の中学校と直接比較される機会が多いとする現実を反映していると考えられる。

(3) 性差からの分析

「教師の体力」（男性：M＝2.55, SD＝1.21、女性：M＝2.86, SD＝1.07 t＝2.27, p＝.02）にのみ有意差が見られ、女性教師の方が体力的な負担をより多く感じているようである。

3) 因子分析と単純分析結果を含めた分析

クラブ活動指導上の問題点は、教師の個人的能力（因子1）と指導体制や施設・設備（因子2）に因るものとに分けることができる。

全体としては、クラブ活動の「施設・設備・備品」と「教師の適切のクラブ分担」とが高い問題点（尺度値：3以上）として指摘されていた。

中学校の教師の方がクラブ活動の指導に高い問題意識を持ち、特に、「指導体制や設備・備品」により高い指導上の問題点を指摘している。また、女性教師に「教師の個人的能力」要因に関する高い問題意識を抱えている傾向が伺えた。

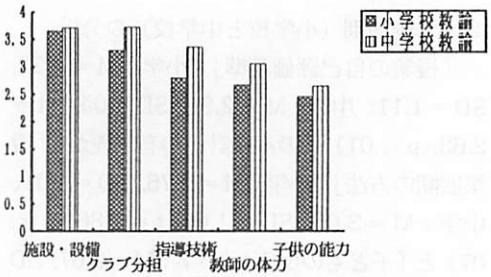

図2－1　クラブ指導上の問題点
（小・中学校別）

2－2　クラブ活動指導の改善の方向

クラブ活動指導の改善の方向として「重要である」と考える度合を、5項目について5段階評定尺度（1：どちらともいえない、3：かなり重要、5：非常に重要）で求めた。

1) 因子分析結果からの分析

5項目について因子分析した結果、2つの主因子を抽出し以下のように命名した。

a　教師関連因子（寄与率：24.68％）：「教師の積極的参加」(負荷量：0.67)、「指導計画の立案・充実」(負荷量：0.61)

b　子ども関連因子（寄与率：8.26％）：「子どもたちの技術（技能）の向上」(負荷量：0.40)、「活動時間の延長」(負荷量：0.36)、「子どもたちの解放感」(負荷量：0.22)

2) 単純集計からの分析

(1) 全体からの分析

クラブ活動指導の改善にあたり「重要である」と考えている度合は、「教師の積極的参加」(M＝3.01, SD＝1.27)、「指導計画の立案・

充実」(M = 2.89, SD = 1.16)、「子どもたちの解放感」(M = 2.89, SD = 1.22)、「子どもたちの技術（技能）の向上」(M = 2.39, SD = 1.02)、「活動時間の延長」(M = 1.77, SD = 0.99）の順であり、かなり重要である（尺度値：3以上）と考えていた項目は「教師の積極的参加」だけであった。

(2)　学校種別（小学校と中学校）の分析

「教師の積極的参加」（小学：M = 2.91, SD = 1.23、中学：M = 3.28, SD = 1.34　t = 2.35,p <.01）と「子どもたちの技術（技能）の向上」(小学：M = 2.28, SD = 0.99、中学：M = 2.72, SD = 1.05　t = 3.53, p <.01）の2項目であり、いずれも中学校教師が改善点としてより重要であると答えていた。

(3)　性差からの分析

「教師の積極的参加」(男性：M = 3.24, SD = 1.41、女性：M = 2.92, SD = 1.20　t = 2.02, p = .05）にのみ有意差がみられ、男性教師の方が「教師の積極的参加」を求める傾向の高いことが示された。

3)　因子分析と単純分析結果を含めた分析

クラブ活動の改善の方向は、教師関連因子と子ども関連因子とに分けることができる。

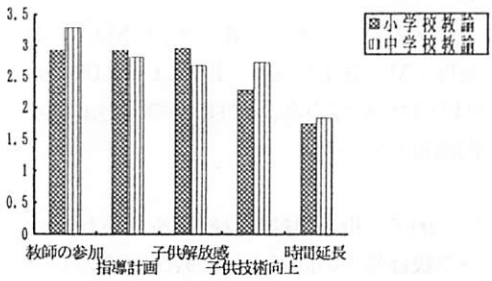

図2－2　クラブ指導改善の方向
（小・中学校別）

全体としては、教師関連因子の要因である「教師の積極的参加」のみがかなり重要（尺度値：3以上）であると認識されていた。特に、中学校で、男性教師が「教師の積極的参加」を求めていることが伺える。また、小学校ではクラブ活動による「子どもたちの開放感」を、中学校では「技術（技能)」の向上を求める傾向が見い出された。

3　学級経営

3－1　学級経営上の留意点

学級経営にあたっての留意点を5項目について検討した。回答方法は、5段階評定尺度（1：どちらともいえない、3：かなり留意、5：常に留意している）であった。

1)　因子分析結果からの分析

留意点に関する5項目の因子分析の結果、2つの主因子を抽出し以下のように命名した。

a　集団形成関連因子（寄与率：31.18％）：「学級のまとまり」(負荷量：0.70)、「子ども同士の協力」(負荷量：0.71)、「基本的生活習慣の育成」(負荷量：0.49)

b　個人の成長関連因子（寄与率：15.67％）：「豊かな人間性の育成」(負荷量：－0.53)、「子ども達の個性の尊重」(負荷量：－0.51)

2)　単純集計からの分析

(1)　全体からの分析

学級経営上留意している度合は、「学級のまとまり」(M = 4.31, SD = 0.82)、「子ども同士の協力」(M = 4.31, SD = 0.81)、「基本的生活習慣の育成」(M = 4.23, SD = 0.85)、「豊かな人間性の育成」(M = 4.23, SD = 0.81)、「子どもたちの個性の尊重」(M = 4.07, SD = 0.90）の順であるが、いずれの項目もかなり高い得点（尺度値：4以上）を示し、学級経営上非常に重要視していることが伺える。

(2)　学校種別（小学校と中学校）の分析

「子どもたちの個性の尊重」（小学：M＝4.11, SD＝0.86、中学：M＝3.91, SD＝0.98 t＝1.70, p＝.09）にのみ、小学校教師の方がより留意している傾向が認められた。

(3)　性差からの分析

いずれの項目にも有意な意識の偏りは見いだせなかった。

3）因子分析と単純集計結果を含めた分析

学級経営上留意する点は、集団形成（因子1）と個人の成長（因子2）に関連する側面に分類することができる。項目として設定したすべてに高く留意（尺度値：4以上）していることが示された。しかし、小学校教師の方が「個性の尊重」などの個人の成長因子により留意している様子が伺えた。

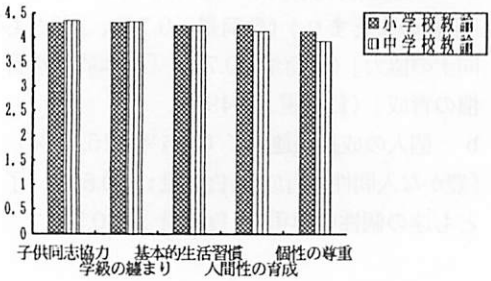

図3－1　学級経営上の留意点
（小・中学校別）

3－2　学級経営上の問題点

学級経営にあたっての問題点を5項目について検討した。回答方法は、5段階評定尺度（1：どちらともいえない、3：かなり問題 5：非常に問題である）であった。

1）因子分析結果からの分析

5項目についての因子分析の結果、以下のような2つの主因子を抽出した。

a　教師関連因子（寄与率：26.2％）：「学校・学年の教育方針」（負荷量：0.66）、「学級経営技術」（負荷量：0.63）

b　子ども関連因子（寄与率：5.64％）：「学力差」（負荷量：0.30）、「子どもの家族の非協力」（負荷量：0.30）、「子ども同士のいじめ」（負荷量：0.25）

2）単純集計からの分析

(1)　全体からの分析

学級経営上問題であると感じている度合は、「子ども同士のいじめ」（M＝4.12, SD＝1.11）、「学級経営技術」（M＝3.63, SD＝1.04）、「子どもの家族の非協力」（M＝3.53, SD＝1.02）、「学力差」（M＝3.33, SD＝1.11）、「学校・学年の教育方針」（M＝3.23, SD＝1.13）の順であり、すべての項目とも重要視しているが、特に、「いじめ」に高い問題意識を持っている様子が伺えた。

(2)　学校種別（小学校と中学校）の分析

「学力差」（小学：M＝3.44, SD＝1.04、中学：M＝3. 03, SD＝1.10　t＝3.21, p＜.001）についてのみ、小学校教師の方がより強く問題視していた。

(3)　性差からの分析

「学力差」（男性：M＝3.13, SD＝1.16、女性：M＝3.40, SD＝1.09　t＝2.05, p＝.042）についてのみ、女性教師の方がより強く問題視していた。

3）因子分析と単純集計結果を含めた分析

学級経営上の問題点は、教師関連因子（因子1）と子ども関連因子（因子2）とに分けて考えることができる。5項目いずれも学級経営上問題であると強く（尺度値：3以上）認識していた。すべての教師が子ども関連因

子である「子ども同士のいじめ」（尺度値：4以上）に強い問題意識を抱いていた。また子どもの「学力差」については、小学校教師や女性教師がより強く問題感を抱いているようである。

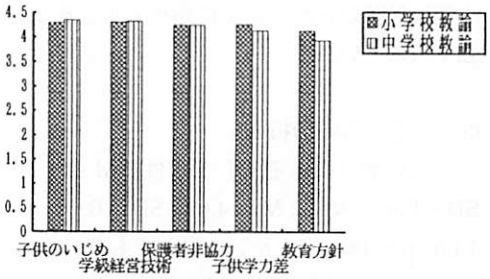

図3－2　学級経営上の問題点
（小・中学校別）

4　問題を抱えた子どもの指導

問題を抱えている子どもの指導にあたって、どの様な点を重要視しているかを5項目について検討した。回答方法は、5段階評定尺度（1：どちらともいえない、3：かなり重視 5：非常に重要である）であった。

1）因子分析結果からの分析

5項目から2つの因子を抽出し、次のように命名した。

a　まわりの協力関連因子（寄与率：27.1％）：「同僚の協力」（負荷量：0.66）、「子どもの家族の協力」（負荷量：0.58）

b　指導・援助関連因子（寄与率：19.6％）：「諸機関との連携」（負荷量：0.54）、「上司の指導」（負荷量：0.52）、「指導技術」（負荷量：0.40）

2）単純集計からの分析

(1)　全体からの分析

問題を抱えた子どもの指導にあたって重要視している度合は、「子どもの家族の協力」（M＝4.51, SD＝0.82）、「同僚の協力」（M＝4.06, SD＝0.90）、「上司の指導」（M＝3.76, SD＝1.08）、「諸機関との連携」（M＝3.66, SD＝1.13）、「指導技術」（M＝3.66, SD＝1.10）の順であり、いずれの項目も重要視している（尺度値3.5以上）ことが伺える。特に、問題を抱えている子どもの「家族」や「同僚」の協力の重要性を指摘している。

(2)　学校種別（小学校と中学校）の分析

「子どもの家族の協力」（小学：M＝4.47, SD＝0.86、中学：M＝4.64, SD＝0.70　t＝1.91, p＝.06）と「同僚の協力」（小学：M＝3.97, SD＝0.91、中学：M＝4.25, SD＝0.83　t＝2.59, p＝.01）について、いずれも中学校教師の方がより多くの「協力」を求めていた。

(3)　性差からの分析

「同僚の協力」（男性：M＝3.93, SD＝0.91、女性：M＝4.11, SD＝0.89　t＝1.68. p＝.09）についてのみ、女性教師の方がより多くの同僚からの「協力」求めていた。

3）因子分析と単純集計結果を含めた分析

問題を抱えた子どもの指導にあたって重要視する点は、まわりの協力関連因子（因子1）と指導・援助関連因子（因子2）とに分けて考えることができる。いずれの項目も指導上重要である（尺度値3.6以上）と見なされているが、特に、保護者や周りの同僚からの「協力」が大切であると見なされていた。この傾向は、中学校教師に、また、女性教師に多く見られた。

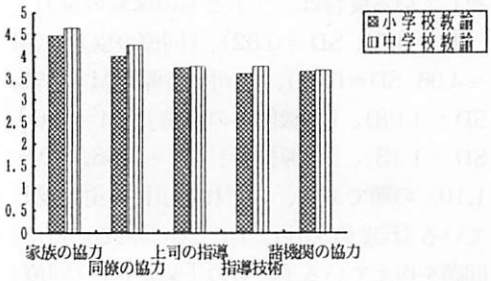

図4　問題を抱えた子供の指導
（小・中学校別）

5　教師の子どもへの期待像

教師の求める子どもの期待像を5項目について5段階評定尺度（1：どちらともいえない、3：かなり期待、5常に期待している）で求めた。

1）因子分析結果からの分析

5項目から2つの因子を抽出し、次のように命名した。

a　自立志向関連因子（寄与率：22.18％）：「何でも一生懸命努力できる子」（負荷量：0.66）、「思いやりのある子」（負荷量：0.60）、「元気に誰とでも遊べる子」（負荷量：0.56）

b　規律志向関連因子（寄与率：15.82％）：「クラスのリーダーになれる子」（負荷量：－0.61）、「親や教師の言いつけの守れる子」（負荷量：－0.60）

2）単純集計からの分析

(1)　全体からの分析

教師の求める期待の度合は、「思いやりのある子」（M＝4.59, SD＝0.73）、「何でも一生懸命努力できる子」（M＝4.55, SD＝0.74）、「元気に誰とでも遊べる子」（M＝4.33, SD＝0.87）、「クラスのリーダーになれる子」（M＝3.07, SD＝1.03）、「親や教師の言いつけの守れる子」（M＝2.98, SD＝1.07）の順であった。

(2)　学校種別（小学校と中学校）の分析

「元気に誰とでも遊べる子」（小学：M＝4.48, SD＝0.77、中学：M＝3.86, SD＝0.98 t＝5.76, p＜.01）にのみ有意差が認められ、小学校教師の方が「元気に遊べる子」をより強く求めていた。

(3)　性差からの分析

「思いやりのある子」（男性：M＝4.46, SD＝0.83、女性：M＝4.64, SD＝0.69 t＝1.88, p＝.06）と「元気に誰とでも遊べる子」（男性：M＝4.17, SD＝0.95、女性：M＝4.38, SD＝0.84 t＝1.90, p＝.06）とに、女性教師の方がより強く求める傾向が認められた。

3）全体からの分析

教師の求める子どもの期待像は、自立志向関連因子（因子1）と規律志向関連因子（因子2）とに分けることができる。圧倒的多数の教師が、自立志向関連因子である「思いやり」のある「一生懸命努力」する「元気に遊べる」子になることを期待していた。小学校の教師や女性教師は、「思いやり」や「元気に遊べる」といった項目をより強く選択する傾向が見られた。

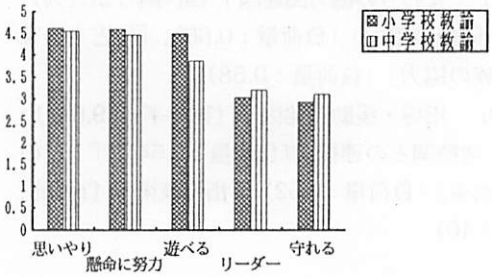

図5　教師の期待像
（小・中学校別）

討　論

道徳、クラブ活動、学級経営、問題を抱えている子どもへの指導、教師の子どもたちへの期待について簡単にまとめながら検討する。

1　道　徳

1）道徳の指導方法

子どもの活動中心因子（役割演技、話合い、視聴覚教材）と教師の活動中心因子（教師の説話、読物の利用）とに分けることができる。全体では、「話合い」、「読物」、「教師の説話」が主に利用されていたが、「役割演技」は、ほとんど利用されていなかった。中学校では「教師の説話」が、小学校では「話合い」が最も多く利用されていた。女性教師は、「話合い」、「視聴覚教材」、「役割演技」をより多く用いていた。

子どもの活動中心の指導方法として「話合い」を教師中心の方法として「教師の説話」を最も多く用いていることが伺える。

教師は学習指導要領が示唆しているような、子どもの実態やねらいに即した多様な指導方法を習得する必要がある。

2）道徳の授業展開

授業時間中に関わる因子（子どもの反応、子どもたちへの効果）と教師の能力に関する因子（授業の自己評価基準、教材の選択、授業展開の方法）とに分けられた。全体では、「授業の自己評価の基準」、「子どもたちへの効果」といった道徳の「評価」に道徳の授業展開の難しさを示していた。特に小学校にこの傾向が顕著であった。指導要録の項目や記入方法の改訂に伴い、子どもの「評価」に関する研修の強化が望まれる。

2　クラブ活動

1）クラブ活動指導上の問題点

教師の個人的能力（指導技術、教師の体力）と指導体制や設備の因子（子どもの能力差、施設・設備・備品、教師の適切なクラブ分担）とに分けることができる。全体としては、「施設・設備・備品」、「教師のクラブ分担」、「指導技術」に関する問題点を強く主張していた。中学校教師の方がすべての項目に強く問題点を指摘しており、女性教師は「体力的」な自信のなさを示していた。

効果的なクラブ活動の指導のために、指導体制や設備・備品の整備が待たれる。

2）クラブ活動指導の改善の方向

教師関連因子（教師の積極的参加、指導計画の立案・充実）と子ども関連因子（子どもたちの技術の向上、活動時間の延長、子どもたちの解放感）とに分けられる。全体としては、「教師の積極的参加」、「指導計画」など教師関連の改善の方向性が強く指摘されていた。中学校教師の方が、男性教師の方がより強く「教師の積極的参加」と「子どもたちの技術の向上」を主張していた。

クラブ活動指導の目標の一つである「自主性・自発性・社会性の育成」、「充実した豊かな学校生活」といった点を十分考慮したすべての教師の「積極的参加」と「施設・設備・備品」の整備を目指す学校運営の工夫が待たれる。

3　学級運営

1）学級経営上の留意点

集団関連因子（学級のまとまり、子ども同士の協力、基本的生活習慣の育成）と個人関連因子（豊かな人間性の育成、子どもたちの個性の尊重）とに分けることができる。全体としては、すべての項目に十分留意すべきで

あると認識している結果であった。また、小学校の教師の方が、「個性の尊重」をより重要視している傾向が見られた。

子どもを中心とした視点から学級運営を考える場合、集団と子どもたち一人一人の成長といった2つの側面から考えることは大切であるが、「クラスのために」といった教師の管理的側面からの指導にならないよう十分注意する必要がある。

2)　学級経営上の問題点

教師関連因子（学校・学年の教育方針、学級経営技術）と子ども関連因子（学力差、子どもの家族の非協力、子ども同士のいじめ）とに分けることができる。全体としては、すべての項目とも問題であるが、特に「いじめ」を問題視する傾向が認められた。中学校の教師、女性教師の方が子どもの「学力差」を学級経営上問題視しているようである。

心理学の原因帰属理論の立場から考案すると、子どもの問題行動の原因はすべて子どもの側にあると考えるのではなく、まず、教師自身の指導方針や指導能力に原因を置く指導態度も大切なことである。

4　問題を抱えた子どもの指導

まわりの協力関連因子（同僚の協力、子どもの家族の協力）と指導・援助関連因子（諸機関との連携、上司の支援、指導技術）とに分けることができる。全体としては、いずれの項目も重要視しているが、特に同僚や問題を抱えている子どもの家族の「協力」を重視していた。また、中学校教師、女性教師の方がこの傾向は高かった。

カウンセリング・マインドや技法を身につけた教師の育成は急務であるが、教師としての治療の限界を認識し諸機関との緊密な連携をとる努力も必要である。

5　教師の子どもたちへの期待像

自立志向関連因子（何でも一生懸命努力できる子、思いやりのある子、元気に誰とでも遊べる子）と規律志向関連因子（クラスのリーダーになれる子、親や教師の言いつけの守れる子）とに分けることができる。全体として、「思いやり」、「一生懸命努力する」、「元気に遊べる」といった自立志向の子どもを期待する傾向が見られた。小学校教師に、女性教師に「思いやり」と「元気に遊べる子」を期待する傾向が強く認められた。

深谷ら（1994）の集団協力因子は抽出できなかったが、これは項目数が5つと極めて少数であることに因ると考えられる。

多くの教師が規律志向よりも子どもの自立をより高く期待しているこの結果は、今後の教育に一筋の光明を投げかけるものであった。

引用・参考文献

1)　小川一夫（編著）1985 学校教育の社会心理学　北大路書房
2)　深谷昌志 1994 モノグラフ　中学校の世界 vol.47 福武書店教育研究所
3)　木川達爾（編著）1985 学級経営の理論と方法　めいけい出版
4)　文部省 1988 小学校指導書　道徳編
5)　高橋哲夫（代表）1994教員養成基礎教養研究会（編）生徒指導の研究　教育出版